



パンダの旅

作成: 畑田慶子



パンダのレンレンは、
毎日お日様の下で、美
味しい笹を食べて過ご
していました。レンレ
ンの毎日は、完璧な円
のように、静かで満た
されていました。



けれど、ある朝、レン
レンは胸の奥に、小さ
くて、まるくて、どこ
にもない「特別な何
か」を探したいとい
う、不思議な気持ち
を見つけました。



「旅に出るよ」レンレンがそっと呟くと、地面の下から、小さなモグラのホリホリが顔を出しました。「旅？面白そうだね。僕が道案内するよ！」



レンレンとホリホリの旅が始まりました。まずは、遠くの山の頂上を目指しました。ホリホリは地面を掘り、レンレンは大きな体で、ゆっくりと歩きました。



「特別な何か」は、旅の地図にも、ホリホリの鼻先にも、見つかりません。代わりに、レンレンは初めて、雨上がりの虹の美しさに出会いました。



そして、とても甘い、誰も知らない木の实を見つけました。レンレンはホリホリと半分こして、小さな「おいしい」を分け合いました。



ある夜、レンレンは故郷の笹の葉の匂いを思い出しました。「もしかしたら、『特別な何か』は、もう見つかっているのかもしれないね」と、ホリホリが言いました。



レンレンは、故郷へ引き返すことにしました。旅の道は、不思議と行きよりもずっと近く、ずっと明るく感じられました。



「特別な何か」は、遠い場所に隠れていたのではありません。それは、レンレンが旅をして、故郷を愛おしいと思う気持ちの中に、いつだって、まるい光となって輝いていたのです。

